

6. 所感及び提言

(1) 調査団所感

帰国してみると、タイを訪れたのは短い期間であり、滞在中は毎日のスケジュールをこなすことに精一杯で、どれだけタイについて学ぶことができたのか、という感がある。

この滞在中、'98年度経済Bグループの帰国青年が中心となって、我々のために様々な心配りをしていただいた。今回の調査団員の全員が、彼らの受け入れに関わっているとはいえ、彼らの手厚い配慮にはとても感謝している。また、彼らの「心配り」から、タイ人の考え方や生活のスタイルの一端が垣間見えたと同時に、我々の本事業のプログラムへの関わり方について、ふりかえる良い機会となった。

限られた体験の中から、タイや本事業の全体像を理解し、今後の方向性を示唆することは到底不可能であるが、個々のプログラムに関して問題点を見つけ出し、改善していくための端緒を掴めたのではないか。また、そうしていくことが、彼らの「心配り」に応えることができる唯一の方法だと感じている。

今回のアフターケアで知りえた事柄や感じた事を、本事業に関するできるだけ多くの人々に伝え、より良いプログラムを作り、より良い研修結果を得られるような運営に心掛けることが、これからの調査団員一人一人の使命だと痛感している。

(2) 団員所感

イ. 「アフターケア調査を通して」 猪田 英史

今回のアフターケア調査への参加で、十数回目の訪タイになる。これまでは、仕事の関係での訪タイだったので、地方都市での滞在が多く、バンコクの滞在は数日で、しかも観光が中心だった。しかし、今回はバンコクとその周辺の、しかも視察や訪問が中心の内容の滞在であった。これまで自分の中で知っていたタイとは、違うタイを知ることができた。

タイと日本の間には、大きな海が横たわり、物理的にも、経済的にも、両国間の往来や交流、協力の妨げとなっている。しかし、相互理解や信頼、友情を深めるという観点から、この物理的、経済的な障害を乗り越える試みとしての「青年招へい事業」の成果の一端に、今回の訪タイで触れることができた。多くの人たちと出逢い、アセアン青年招へい事業の事柄を軸に、多くの事を語り合った。その内容は、本事業の総括的なものから、個々のプログラムの感想、日本での体験など、広い範囲にわたった。ほとんどの人たちが、本事業の有効性を認めており、本事業の継続とさらなる発展を望んでいる。日本での体験を語る帰国青年の、生き生きとした表情や、大きく輝いた瞳が、彼らの日本での体験が深く心に刻まれ、貴重な経験となっていることを物語っ

ていた。こうした経験から相手のことを好きになり、ともに未来のために力を合わせることができるキッカケになっていくのだと、感じた。

私たちは滞在中、ホスピタリティー溢れるもてなしを受けた。そして、まったく違う文化に接する生活を通じて、生活スタイルや考え方、食の嗜好など、非常に多くの事を感じ取ることができた。そして、その違いを知識として理解するだけでなく、タイの暑さや空気、音、など私たちを取巻く、すべての環境から、その違いの意味というか、必然性のようなものの端緒を掴むことができた。これは、非常に貴重な経験となった。きっと参加青年たちも、日本で、私たちと同じような経験をし、知識を経験にしていったのだろう、と思うと、改めて本事業の良さを実感することができた。「多様性を認め合う」、「違いを理解する」、国際交流や理解という場面で、良く用いられるキーワードである。もちろん、書物やテレビなどのメディアを通じて「多様性」や「違い」を知識として理解することはできる。しかし、体験や経験に基づいた形で、「多様性」や「違い」を心に刻むことは、相手を知る上で最良の方法の一つであろう。

青年招へい事業は、直接的、即効的な効果を期待するプログラムではない。未来のより良い、適切なパートナーシップを築くための基礎作りを担う事業であろう。今回のアフターケア調査を通して、「知ること」、「好きになること」、「人と人が力を合わせること」が別々にあるのではなく、一つに繋がっていることだと再認識した。青年招へい事業によって、お互いに知り合い、好きになることができた。そして、アフターケア調査によって、それを再確認し、さらに深めることができた。この思いをできるだけ多くの人に伝え、より良い未来のために、どのように力を合わせることができるのかを考えていきたい。

ロ。「共生 生きている、生かされている」

水野 孝一

タイの中心としてばかりでなく、東南アジア経済の中心となっている巨大都市バンコク。絶えず車の波が交差し、底知れないエネルギーが燃え続けているまちである。このバンコクに降り立ったとき、熱帯特有の足下からわき上がってくるような熱気と、これから始まるプログラムを思い、軽い目眩を覚えた。今回機会あって、このアフターケアチームに参加させていただき、初めて訪れたタイは強烈な印象で私を迎えてくれた。

ASEAN諸国(タイ王国)青年招へい事業が1984年に始まって以来、交流の輪は2,200余の波紋となって日本とタイ、両国の人の心の中に広がっている。この事業を実施しているJICAならびにその関係機関の方々、地方プログラム担当者、合宿セミナー参加者、プログラム関係者、そしてホストファミリーの方々。また、タイ側のNYB、日本大使館、そしてJICAタイ事務所の方々など、この事業に直接または間接的に関わっ

た人の心の中で、どのような波を描いているのだろうか。交流とは何だろうか？人として対等の付き合いだろうか？私自身、今回本当にそう思ってタイに来たのだろうか？どこか心の片隅に「協力している」「援助している」という意識があったのではないだろうか？訪タイ前の自分の気持ちを考えてみると、そんな思いを拭い去ることができない。しかし、バンコク・ドンムアン空港のゲートをくぐったとき思いもしなかった帰国青年たちの歓迎を受け、その懐かしい顔、3ヶ月ぶりに見る優しい笑顔に触れたとき、私のそんな思いは消散していた。

タイ国は「微笑みの国」と言われる。それは、この国が太陽と水の恵みによって、建国以来飢饉に見舞われたことがないこと、仏教が浸透していることなどが関係しているように思う。実際に老若男女を問わず人々の笑顔が美しい、本当に美しい。

この国は、国としては発展途上国かもしれない。しかし、個人レベルで見れば、学問に対して真剣に取り組み、その成果として得た仕事に自信と誇りを持っている、素晴らしいひとたちが多い。アフターケア研修の目的の一つに「帰国青年の活動現場視察を通じて、日本における研修成果の確認をする」というものがある。今回は、Bangsai Art and Crafts Training Centerはじめ3カ所を訪問し、帰国青年たちが働いている現場を見させていただいた。Banbsaiでは驚くほど精密な手工芸品が作られており、このプロジェクトに携わっているトーンさん、ご夫婦でDairy Belleというアイスクリーム工場を営んでいるガイさん、Pakkred Babies' Homeという乳児院で働くノックさんなど、どの青年の目も自信に満ち、自分の仕事に誇りを持って取り組んでいることが質疑応答の中でよく理解できた。

また、今回は当初からのプログラムとして、ホームステイがあり、我々が招かれる側となって青年招へい事業のプログラムを検証する予定であった。初めて訪れる国、初めて会う人たち、言葉の壁、なかなか伝わってこない相手側の情報など、いろいろな思いが交錯し、私自身不安な思いにかられていた。招へい青年たちがホストファミリーなどに関することについて、事前に知りたがる理由がよくわかった。今年の招へい事業の中で、我が家においてもホストファミリーをお引き受けしたが、日本側のコーディネーターの方からのアドバイスで、対面式において家族構成やステイ中の行動予定などを文章にしてお渡ししたため、スムーズにお受けできたように思う。やはり情報は早く、正確に交換する必要があると感じた。

今回はホームステイの代替プログラムとして、'98年度経済Bグループのメンバーなど16名とカンチャナブリ県周辺を1泊2日で訪れた。我々4名を加え、計20名が4台の車に分乗し、途中で何度も道を間違えるというハプニングを起こしながら、楽しいショートトリップを過ごさせていただいた。私が乗せていただいたヌーさんの車は、前週に納車されたばかりの新車で、ご主人が運転手として2日間案内していただ

いた。カンチャナブリ周辺には史跡も多く、タイの歴史を感じるとともに、クワイ川
マーチで有名となった泰面鉄道もあり、日本とタイの関係についても再度考えさせら
れた。

現在、タイ国に滞在する日本人は長期滞在者が約3万人と観光客も常時2万人の合
計約5万人がいると言われる。そのために、町の至る所に日本語の看板が見られ、日
本料理店もバンコク市内だけで80店ほどあるようだ。また、市内を走る車の多くも
日本車であり、また逆に日本においても衣類を中心としてタイ製品も多く輸入されて
おり経済的な結びつきは大変強い。今後は観光を含む経済的な結びつきだけでなく、
青年招へい事業のような人的結びつきをますます強化し、息の長い交流・理解活動を
続けていく必要性を感じた。

今回、ショートトリップに招待してくれた、'98年度経済Bグループ有志の皆さん
はじめ、忙しい業務の時間を割いて我々にお付き合いして下さった方々に、心より
感謝するとともに、これほどの歓迎を受けられたのは、彼らが訪日した際に日本の皆
さんが彼らに対して与えて下さった「思いやりの心」のおかげであり、我々はたま
たまタイに行ったがために代表して歓迎を受けることができたに過ぎない。このよ
うな機会を与えていただいたJICA および関係の日本の皆さんに感謝を申し上げたい。
『共生』人は一人では生きてはいけない。多くの見知らぬ人々のおかげで生きている、
生かされている。今回の我々の研修が、次のプログラム展開の一助となり、誰かの共
生の役に立つことができれば幸いである。そのことを実感させられた1週間であつ
た。

ハ、「ホームステイについて」

柴田 真理子

私はこれまでこの青年招へいプログラムにおいて、単なるホームステイプログラ
ムのホストファミリーの一員として関わりを持っただけであったが、今回アフターケア
チームに参加させていただくことで、初めて、事業全体を見渡して考える良い機会と
なった。そのような中で、ここでは、ホームステイの意義について考えてみたい。

同窓会、王立青年局などでヒアリングした結果、総じて「ホームステイは大変楽し
いプログラムであった。」という意見であり、嬉しく感じた。誰もが「日本のホスト
ファミリーが、本当の家族の一員として接してくれた。」ことに感激しているようであ
った。この経験は唯一ホームステイで得られるものであり、今後とも是非、引き続
きプログラムの一環として組んでいただきたいものである。

ホームステイで困ったこととしては、食べ物のことをいくつかあげていたが、どん
なに口に合わなかったかを説明する姿を見ていると、それは実は楽しい思い出なのだ
ろうと思われた。自分を振り返ってみると、日本のホストファミリーはとにかく、「タ

イの習慣にないことだから…」「タイでは食べないものだから…」などと考えがちである。しかしながら、日本を訪れる青年たちは何にでも積極的にチャレンジする姿勢であるから、私たちが日常生活で普通に食べているもの、行っていること、等をごく普通の形で、躊躇することなく、共にすることが大切なのだとしみじみ感じた。そして、そういった習慣の違いに気づいた時に、どうしてそういった習慣があるのか、といったことを話し、お互いの理解を深めることが大切だと思う。

今回、事前の打合せでは日程に組まれていたホームステイプログラムが、ショートトリップに変更となったことを聞いたのは、現地でのことであった。即ち、ホームステイはなく、同じホームステイプログラムというという枠の中での「訪れる側・受け入れる側」の単純な比較はできなかった。ショートトリップというのは、バンコクから300キロ程離れたカンチャナブリへの1泊2日の旅行で、ホストファミリーが招待するという形で実施された。当初、私たちのホストファミリーを引き受けて下さった4名は、いずれも、今年の夏、日本を訪れた「経済Bチーム」のメンバーであった。ホームステイがショートトリップに変更となった理由は、「ホームステイであると4人しかプログラムに参加できないが、ショートトリップであれば、多くのチームメンバーが参加できるから。」だそうである。実際、ある帰国青年が「あなたのホストファミリーを引き受けたかったけれども、マウスさん(我が家にホームステイした青年で、今回私のホストファミリーを引く受けて下さった)がいたから、あきらめたわ。」と話してくれた。多くの帰国青年がアフターケア調査にも協力的であること、そして、日本でお世話になった分、今度は自分たちが世話をしたいと考えてくれていることを知ることとなった。

ショートトリップに参加したのは、日本人の私たち4人を含めて20人である。こんなに多くの帰国青年たちと1泊2日を共にできたのは、非常に幸運であったと思う。4台の車に分乗し、私たち日本人は1人ずつ違う車で、カンチャナブリへと出かけた。この車中の移動において初めて、コミュニケーションをとるのが難しいと感じることとなった。このプログラム以外では通訳をしていただき苦勞をしなかったためである。コミュニケーションに関してはホームステイの中で最も問題となるところだと思うが、今回の経験からして、確かに、十分に話の通じない人々の中に1人置かれると、内容の深い話をするにはつらいものだと感じた。もちろんそのような場面でも大筋は分かるし、つらいことばかりではなく、例えば、夜中に、青年たちと飲みながらおしゃべりをした際には、大変楽しくワイワイ騒ぐことができた。大人数であったから、会話を理解できる人ができない人に伝えるというサポートができたのが良かったと考える。また、それだけでなく、タイ語しかできないという人が、「NIHONGO」という小冊子を見ながら一生懸命何か話しかけてくれようとする姿勢、その姿を見るだけで、

本当に嬉しく感じた。言葉が通じる、通じない、ではなく、コミュニケーションをはかろうとしている姿勢がいかに大切であることを痛感した。

最終日、マウスさんが自宅に招待して下さり、2時間弱の「ホームステイ」を体験することができた。バンコク中心から車で20分程の住宅街にあるご自宅で、ご主人、3歳の息子と3人で暮らしている。話をしたり、あれこれご馳走になったり、家中の部屋、私のためにエアコンまで準備してくれた部屋やキッチン、また、ご主人が6ヶ月かけて作成した庭など見せて頂き、あっという間に時間が過ぎた。幼稚園に通う息子さんを車で迎えに行き、そのままホテルへ戻り、この短い「ホームステイ」は幕を閉じることになった。これにより、タイのある家庭の日常生活のごくごく一部ではあるが、体験できたと思っている。訪問する側に立って初めて、ホームステイというのは、「見知る・聞き知る」のではなく、「入り込んで一緒に生活する」ことに意義があるのだと実感できた。日常生活を共にすることは、相互理解を深める近道でもある、と考えられるのではないだろうか。

ホームステイから変更となったショートトリップは、このアフターケア調査の中で最も思い出深い、楽しいプログラムであり、私個人としては、ホームステイか、ショートトリップか、どちらが良かったとも言い難い。ただ、ぜいたくを言えば、何泊かを共にする、いわゆるホームステイもしたかった、そしてより一層タイ人の日常生活に密着できたら良かったと思う。いつの日か、バンコクのマウス姉さんの家へ行き、私のための部屋がまだあるのか分からないが、果たせなかったホームステイをできればと願っている。ホームステイの意義…もしかするとそれは、人と人とのつながりの中でも最も大きな「家族」を得られることかもしれない。

二. 川面 忍

名古屋にて実施された分野別都内プログラム合宿セミナーに参加した関係で、今回、アフターケアに参加させて頂くことになった。この、名古屋での合宿セミナーの3日間は、タイ青年たちとのディスカッションが主で、他にスポーツ交流等もあり、とても充実した有意義なものであった。また、タイ青年たちの溶け込み易い人柄も大変好ましく、タイ人・タイ国に対し非常に興味が深まっていたところアフターケアプログラムに参加できることになった。タイ人・タイ国との交流の観点から今回のアフターケアプログラムを終えて感じたことを述べたい。

アフターケアプログラム初日、タイのドンムアン空港で入国審査を終え到着ロビーに出ると、合宿セミナーと一緒に過ごした面々が出迎えにきてくれており、到着初日の不安を暖かい歓迎で消し去ってくれた。到着早々、タイ人の「ホスピタリティー」を感じることもあったが、この他様々な状況において彼らの心くばりに秀でた国民性を

交流において再認識した。タイでの帰国青年たちとは、カンチャナブリへの1泊2日のショートトリップで交流をさらに深めた。これは、当初ホームステイをする予定であったプログラムを変更し、帰国青年が私たちのために企画・準備してくれたプログラムであった。

このショートトリップへは、1998年度経済Bグループとして訪日していたメンバー25名の内約半数の13名が参加してくれていた。

日本側の合宿メンバーは、セミナー後は個々にタイ青年と連絡を取り合っているが、日本人同士は殆ど交流が無くなってしまふのに対し、タイ人のこの結束力はうらやましいものがある。この原因を考えて行くと、日本青年にとっては、やはり会社、学校といった組織の一員という意識が大きく、それを越えた人との付き合いはなかなか出来ない面があるのであろう。それに対し、タイでは会社に「属する」という意識は薄く、「契約」の考えが大きい。私が旅行中車に同乗した4人のタイ青年の内、2人が現在転職先を探していると言っていた。この内の1人は、日系企業で働いており、事務所撤退に伴い職を失うこととなるのだが、あせっている様でもないし、ショックも受けていない様子であり、「大丈夫なのだろうか?」と感じたが、これは「会社」に対する日本・タイの意識の違いと、タイ人氣質の「マイペンライ」があるのだろう。

ショートトリップの行先には、映画「戦場にかける橋」の舞台となったクワイ橋があった。ここは、戦争中に日本軍が連合軍の捕虜やアジア各国民を強制労働させて作り上げた橋であり、その他、同様に作られた「死の鉄道」と呼ばれる鉄道も残されていた。ここでは、約10万人の強制労働者・1万6千人の連合軍捕虜が亡くなったそうである。

その後、彼らのため連合軍およびタイ国により、戦後、建設された「戦没者墓地」を訪問した。日本はタイとは戦っていないし、大戦中唯一、日本に侵略されなかった国なので、タイ青年達がどの程度戦争について知識があり、戦争時にとった日本のやり方に対しどのような感情を持っているのか分からない。私自身も学生時代の歴史の授業や、広島・長崎への訪問などで、戦争についての知識は得ていたし、侵略を行っていたことで、日本とアジア諸国の人々との間にわだかまりが今なお存在することは知っていたが、自分が「アジア諸国の方々にお詫びしなくては」と思ったことはなかった。そのため、この「戦没者墓地」に行って延々と続く七千近くもある墓標を見た時、いたたまれなさを感じると共に「なぜ、このようにいやな所へ連れてこられたのだろう。」とタイ青年に対し、少し恨めしく思った。「彼らはなぜ、楽しく交流することが目的のはずのショートトリップに、この場所を選んだのだろう?」「戦没者墓地」を最後にバンコクへと帰る車中では、ここ数日の疲れもあってすっかり落ち込んでしまい、さすがにタイ青年と話をする気にはなれず、このことを考えていた。帰りの車中

で隣にずっと乗っていたジュイさんは、「日本に関係の深い所だし、ここに連れて来たかった。」と話しかけてくれたが、何と応えていいのか分からなかった。「日本に対してどういう感情を持っているのか?」と聞く勇気もなかったし、「連れてきてくれてありがとう。」という気持ちでもなかった。彼らもそれ以上は何も言わないため、それきり話題にのぼることなくアフターケアプログラム終了となった。帰国後の今でもよく分からない。「日本は、こんなひどいことをしたんだよ。」と教えたかったのか?または、ただ単に「日本と関係のある所を探したらたまたまカンチャナブリであった。」だけなのか?だが、これまで日本-タイ間で戦争はなく、日本に対し友好的であると考えてきたが、今回のショートトリップのおかげで、タイにも日本軍が侵略した跡が残っていることが分かった。

タイ人は表立って非難はしないが、交流する上で日本側は無関心でいてはいけない問題なのかもしれない。32才の兵士の墓標に「あなたの身体はこの世界から無くなっても、あなたの存在は永遠に私達の心から消えないでしょう」と彼の妻と子ども(babyと記載されていた)による追悼文が記されていた。おそらく日本に対するアジア諸国の感情も、時とともに薄れはするが、消えてなくなるものではないのだろう。

最後に、アフターケアプログラムを経験して、プログラム全般に対して意見を述べたいと思う。まず、今回日程の都合で、大使館訪問が後の方になってしまったが、小暮一等書記官に説明して頂いたタイの現況・タイの国民性については、タイで4日間過ごした中で感じたタイ国・タイ人に対する認識が、より明確になったので、この点は良かったと感じた。今年の活動現場視察の内、Pakkred Babies' Home<児童保護センター>については、どのような所なのか当日になるまで分からなかった。分かっていたなら、子どもたちの為にいろいろ持って行く等の事前準備が出来たのに、残念であった。他の視察場所・ホームステイについても、どのような職場なのか・どのような立場の方が何人くらい対応して下さるのか等の情報が事前に分かれば、効率的に事前準備もできるし、「その視察場所の何をみたいか?」という目的を明確にしておく。また、日・タイの比較もでき、より有意義な活動ができると思う。8日間という短い期間ではあったが、タイという国の様々な側面を見ることができ、また、コーディネーターの泉水さんはじめ、タイ在住の日本人の方々のお話を伺うこともでき、日本人から見たタイ国・タイ人感も知り得たことは非常に有意義であった。

(3) 提言

イ. 問題点

- ・参加青年の研修に対する興味が一様ではない。研修が目的なのか、交流が目的なのか、曖昧である。
- ・参加青年の失踪問題が生じた。
- ・日本とタイの間の、事務的なやりとりに時間がかかる。
- ・日本、タイとも本事業終了後の交流が不十分である。

ロ. 問題点の原因または理由

- ・募集時の分野。
- ・募集をこれまでの推薦制から、公募制に切替えたため。
- ・事務書類が、いくつもの団体を経由するため。また書式が一定でないため。
- ・再交流を前提とした組織やプログラムになっていないため。

ハ. 改善のための具体的方策

- ・これまでの5分野(タイに関して)を細分化する。
あるいは、募集に際して分野の詳細(プログラム例などを含む)を公表する。または、プログラムを研修か交流のいずれかに特化する。
- ・公募制を維持しつつ、参加青年の身分を証明する方法を日タイ双方で検討する。
- ・日タイ双方で使用できる書式の開発。英語での表記を求める。事務の標準化。
- ・タイの同窓会のカウンターパートと成り得る組織の育成。
受入関係団体のネットワーク化。
- ・相互交流を促進するためのフォローアップツアー(例 ホストファミリーのためのタイツアー)の企画の推奨、あるいはモデルツアーの提示。

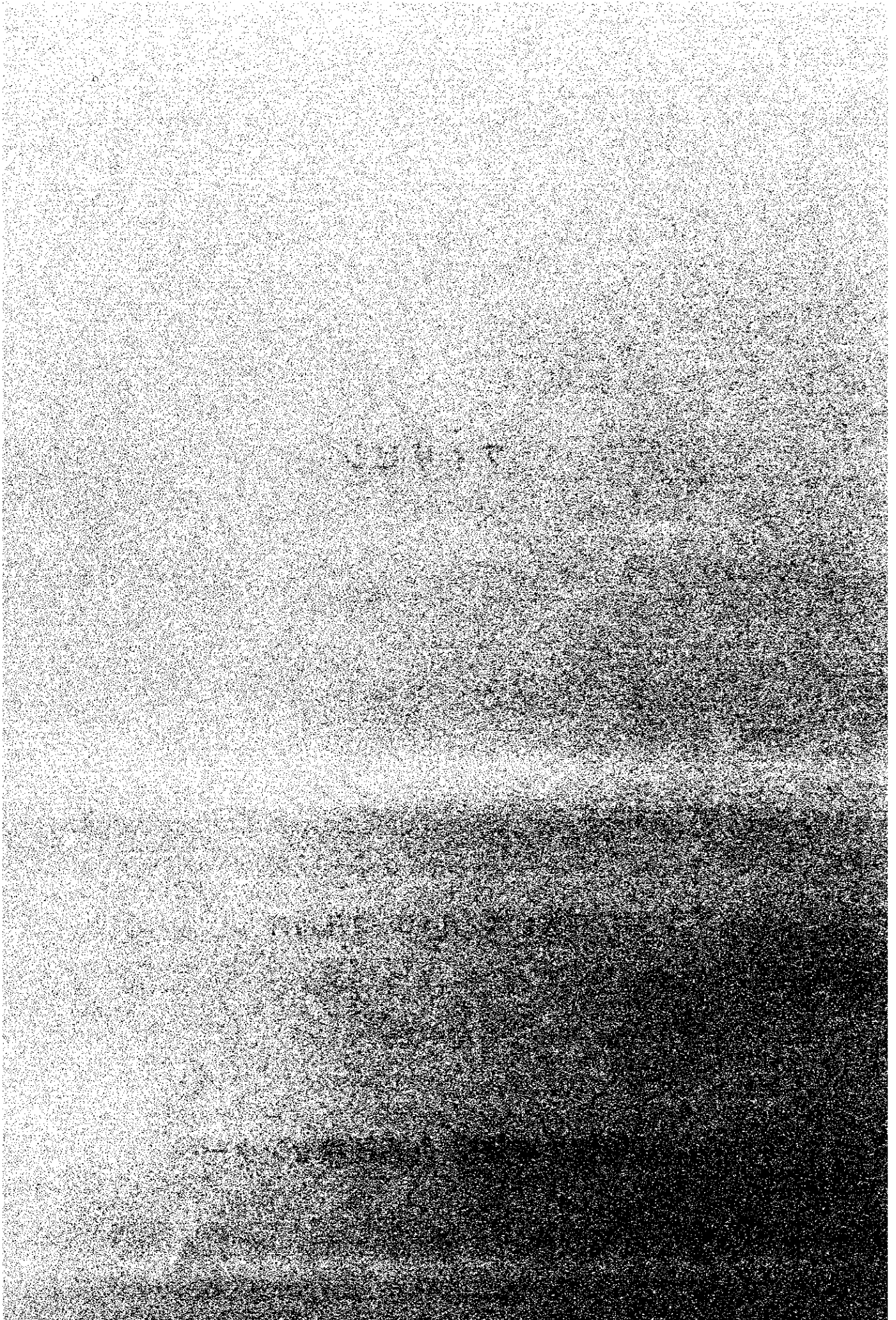
ニ. その他

- ・アジア地区の理解、相互交流という観点から、日本青年の派遣(青年招へい事業の逆パターン)の実施を検討しても良いのではないか。
- ・タイでの同窓会等の活動を定期的に広報する。

フィリピン

平成11年2月4日～2月10日

国際協力事業団 九州国際センター



I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ フィリピン側と、日本におけるプログラムに関し、意見交換及び要望調査を行い、青年招へい事業の一層の周知と理解を図る。
- ・ 帰国青年の職場訪問や交流会などを通じて、青年たちの日本での研修成果とプログラムの改善点について調査する。

2. 調査内容

- (1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency: JICA) フィリピン事務所訪問
 - ・ フィリピンの一般事情、JICAの活動状況及び青年招へい事業への関与、事業運営状況
- (2) フィリピン外務省北東アジア局訪問
 - ・ 青年招へい事業運営状況
- (3) フィリピン帰国青年同窓会 (Philippine ASEAN-JAPAN Friendship Association for the 21st Century: PAJAF-21) 訪問
 - ・ 同窓会活動状況
- (4) 帰国青年との交流
 - ・ 帰国青年との交流を通して、フィリピンと日本の相互理解を深めると共に、青年招へい事業プログラム、特に、地方分野別プログラム(ホームステイ、研修、交流など)についての反省点、改善点の調査を行う。
- (5) ホームステイ
 - ・ フィリピンの一般家庭滞在を通じ、フィリピン人の価値観などに触れ、同国についての正確な理解を図り、相互理解を深める。
- (6) 帰国青年活動現場訪問
 - ・ 帰国青年が、その所属先において、日本での研修で得た「知識」や「成果」をどのように活かし活動しているかについて、実地調査を行う。
 - 〔訪問先〕
 - ・ Local Government Development Foundation (LOGODEF)

内務開発基金

・ Philippine Business for Social Progress (PBSP)

フィリピン NGO 団体

・ Development Bank of the Philippines

フィリピン公立銀行

・ The Overseas Economic Cooperation Fund, JAPAN (OECF)

海外経済協力基金

3. 調査団員

	氏名	所属	青年招へい事業との関わり
リーダー	中嶋 弘二	熊本県青年海外協力協会	分野別地方プログラム担当者
メンバー	長川 康広	大分県海外協会	分野別地方プログラム担当者
メンバー	宮崎 剛	鹿児島県国際交流協会	分野別地方プログラム担当者
メンバー	江口 剛史	九州・山口経済連合会	分野別地方プログラム担当者

II. 調査結果

1. 日程

2月4日(木)

14:00 福岡空港国際線ターミナル集合

18:00 打合せ会議

19:50 福岡空港発 (PR425 便)

22:35 マニラ空港着

23:30 マンダリン・オリエンタルホテルにチェックイン

2月5日(金)

09:00 ホテル出発

09:20 JICA フィリピン事務所訪問

フィリピンでの青年招へい事業運営状況について JICA 石賀所員より聞き取り調査

10:55 フィリピン外務省北東アジア局訪問

12:40 フィリピン外務省北東アジア局長並びに同局職員(帰国青年3名)との昼食会

15:00 同窓会 (PAJAF21) との意見交換会及びセミナー

19:00 歓送迎夕食会 (主催: PAJAF21 と JICA フィリピン事務所)

(Kowloon House 中華レストランにて)

21:30 夕食会終了

22:30 ホテル帰着

2月6日(土)

06:00 各ホストファミリー、ホテルへ迎え

～10:00 各ホストファミリー宅へ

終日 ホームステイ・プログラム

2月7日(日)

終日 ホームステイ・プログラム

夕刻 各自ホテル帰着

2月8日(月)

08:30 ホテル出発

09:15 帰国青年の職場訪問(イ)

Local Government Development Foundation (LOGODEF)

10:50 帰国青年の職場訪問(ロ)

Philippine Business for Social Progress (PBSP)

12:50 昼食

14:30 帰国青年の職場訪問(ハ)

Development Bank of the Philippines

16:00 帰国青年の職場訪問(二)

The Overseas Economic Cooperation Fund, JAPAN (OECF)

18:30 ホテル帰着

2月9日(火)

08:00 ホテル出発

08:45 NAYONG PILIPINO 訪問

フィリピンの伝統建築物伝統文化を見学

11:20 ホテルにて休憩

12:00 ショッピング・モール見学

12:30 昼食

15:00 JICA フィリピン事務所訪問

本調査の報告

17:30 ホテル帰着

2月10日(水)

08:00 ホテル出発

08:50 マニラ空港着

12:20 マニラ空港出発 (NW 26 便)

16:20 関西国際空港着

17:00 反省会

17:30 解散

2. 主要面談者

(1) JICA フィリピン事務所

後藤 洋 所長

黒柳 俊之 次長

石賀 みちる 所員

Ms. Jacqueline I. Ortiz 所員

(2) フィリピン外務省北東アジア局

Mr. Ernesto C. Castro

Director of Northeast Asia Division

Office of Asian Pacific Affairs Department of Foreign Affairs

Ms. Raquel R. Solano

Mr. Roberto Romey Reyes

Mr. Evan P. Abayon

Ms. Mary Michelle C. Tantillan

(3) フィリピン帰国青年同窓会

(Philippine ASEAN-JAPAN Friendship Association for the 21st. Century: PAJAJFA-21)

President Ms. Evangellina G. Lawas

(昭和61年度アセアン混成公務員)

Vice-President Mr. John Yamane Atilano

(平成7年度アセアン混成経済1)

Vice-President Ms. Joy Santos-de Leon
(昭和 63 年度アセアン混成経済)

(4) 帰国青年活動現場

イ . Ms. Jovie Importante

ASEAN Component Public Administration '98
Project Officer
Local Government Development Foundation (LOGDEF)
Mr. Gaudioso C. Sosmena
Executive Director

ロ . Mr. Vic Dugan

ASEAN Component Environment '98
Program Officer
Philippine Business for Social Progress (PBSP)
Office of the Group Director

ハ . Ms. Veronica Ernacio

Economy A Single Country Group '98
Account Officer
Development Bank of the Philippines
Mr. Rolando S.C. Geronimo
First Senior Vice President

ニ . Ms. Marigrn L. Bautista

Program Officer
The Overseas Economic Cooperation Fund, JAPAN (OECF)
田中 裕 マニラ駐在員事務所主席駐在員
大金 正知 マニラ駐在員事務所駐在員

(5) 帰国青年との交流会

Mr. Ernesto C. Castro (フィリピン外務省北東アジア局長)
後藤 洋 (JICA フィリピン事務所長)
黒柳 俊之 (JICA フィリピン事務所次長)

石賀 みちる (JICA フィリピン事務所所員)

Ms. Evangellina G. Lawas

Mr. John Yamane Atilano

Ms. Joy Santos-de Leon

Ms. Jacqueline I. Ortiz

Ms. Genalyn Garcia

Mr. Roberto Romey Reyes

Ms. Jovie C. Importante を含む 19 名の帰国青年

3. 調査結果概要

以下の項目について調査した。

(1) 青年招へい事業全般にわたる帰国青年の評価

- ・日本でのプログラムを高く評価している
- ・専門分野の進んだ施設・設備に触れたり、意見交換会やホームステイなどの日本人との心温まる交流体験を通して、フィリピンと日本の相互理解が深まっている。
- ・帰国後も手紙のやりとりやホストファミリーのフィリピン訪問などの再交流が行われており、予想以上の広がり確認できた。

(2) ホームステイに関する評価

- ・帰国青年宅でのホームステイは、フィリピン人の生活習慣やフィリピン事情を理解するうえで、絶好の機会となった。今後のホームステイ受け入れの際に大いに役立つものと確信する。

(3) 人選、帰国後のフォロー策などについてのヒアリング

- ・参加者の募集、選考方法など漸次改善され、国内の様々な地域から、その職業も官民どちらかに偏ることなく、公正に選抜されていることが確認できた。また、同窓会活動も後輩の指導にとどまらず、積極的な社会奉仕活動をおこなっていることがわかった。

以上の結果、フィリピンにおける青年招へい事業運営状況および改善点を知ることができた。今後さらに、5年間の事業の継続が合意されたことを契機に、本事業を、さらに円滑に、効果的に実施していくために、また、両国間の相互理解と協力関係を、さらに深めるために、有意義なアフターケア調査となったものと確信する。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換やヒアリング内容

イ. JICA フィリピン事務所

面談者 後藤 洋 所長
黒柳 俊之 次長
石賀 みちる 所員

Ms. Jacqueline I. Ortiz 所員

後藤所長から「青年招へい事業によって、フィリピンから来日するだけでなく、今回のように日本からも来比することによって、はじめて相互理解が深まると思う。また、帰国青年の職場職場を訪問したり、同窓会メンバーとの意見交換がフォローアップにつながり、地方公共団体の強化にもつながると思う。アフターケア調査団の来比を歓迎する。今回の調査員は、鹿児島、大分、福岡、熊本から来られたが、フィリピンではこれらの県のJA(農業協同組合)をはじめ、いろいろな組織や団体とのつながりが深まってきている。」また、黒柳次長から、「フィリピンでは、中央と地方の差が大きいので、この問題と取り組むうえでも、この青年招へい事業は大きな役割を果たしている。」という調査団に対する期待と励ましをいただいた。

石賀職員、オルティス所員と調査日程「などの打合せを行った。

調査内容は以下の通りです。

① フィリピンにて実施している JICA 研修事業の種類

3種類 of 研修事業を実施

- ・ 通常の研修=フィリピン人が日本で研修を受ける。
- ・ 第二国研修=フィリピンの地方の人がマニラで研修を受ける。
- ・ 第三国研修=第三国、例えばカンボディア人がフィリピンで研修を受ける。

② フィリピンでの青年招へい事業の参加者募集・人選の方法やその実施機関

フィリピン外務省北東アジア局が、参加者募集、人選を担当している。選考した招へい青年名簿を JICA フィリピン事務所へ提出し、確認・決定後、各青年へ連絡する。同窓会 (PAJAF A-21) の協力を得て、来日前のオリエンテーションを行う。

③ 青年招へい事業の今後の動向

ロ. フィリピン外務省北東アジア局

面談者 Mr. Ernesto C. Castro
Director of Northeast Asia Division
Office of Asia Pacific Affairs Department of Foreign Affairs
Ms. Raquel R. Solano

Mr. Roberto Romey Reyes (帰国青年)

Mr. Evan P. Abayon (帰国青年)

Ms. Mary Michelle C. Tantillan (帰国青年)

以下の項目について意見交換を行った。

① 青年招へい事業の意義について

カストロ氏より、次のような意見が出された。

- ・ 1984年以降、このプログラムによって、延べ2,341名のフィリピン青年が来日している。人と人との友好が、お互いを発展させている本事業に、たいへん満足している。
- ・ 1999～2004年まで、さらに5年間、この事業を継続させることが決定した。フィリピンと日本の友好関係をさらに深めたいと思う。

② プログラムの研修色強化について

青年招へい事業が、近年、研修色を強めていることを、フィリピン側は理解していた。

帰国青年より、次のような意見が出された。

- ・ 文化面での研修が多かった。もっと専門分野の研修を受けたかった。
- ・ 公的な施設見学が多かった。証券会社などの一般企業の訪問、また、その職員との意見交換会がしたかった。

③ ホームステイについて

帰国青年より、次のような意見が出された。

- ・ 日本人を理解するうえで、ホームステイはたいへん大きな役割を果たしている。ホストファミリーと共に遊んだ「けん玉」は、いまでも忘れられない。
- ・ 家族構成や職業などのホストファミリーに関する資料や情報を、来日前に早く知りたい。

④ 来日青年の選考方法について

カストロ氏より、次のような意見が出された。

- ・ 参加青年の募集にあたっては、農業、経済、健康省など12省(軍関係を除く)から選考委員会を結成して取り組んでいる。政府機関紙や一般新聞に掲載して、広く公募している。よって、公的機関ばかりでなく、私企業で働く青年の参加者も増えてきているし、北から南まで、全国から選ばれて

いる。

- ・ 昨年は、応募者が約 350 名で、参加者が 150 名であった。
- ・ 選考委員会が申込書類(履歴書)と論文テストから、参加青年を選考し、来日青年名簿を JICA フィリピン事務所へ提出する。JICA の確認・決定後、各青年へ連絡する。

ハ. 同窓会 (PAJAF A-21)

会 長 Ms. Evangellina G. Lawas (昭和 61 年度アセアン混成公務員)

副会長 Mr. John Yamane Atilano (平成 7 年度アセアン混成経済 1)

副会長 Ms. Joy Santos-de Leon (昭和 63 年度アセアン混成経済)

を含め、男性 2 名、女性 7 名、計 9 名の帰国青年から、同窓会の活動内容についてヒアリングを行った。

[活動目標]

- ・ 人と人のつながり、チームワークを大切にする。みんなで力を合わせれば、ゴールは近い。

[活動目標]

- ・ 招へい青年選考会への関与
- ・ 招へい青年のための事前学習会
- ・ ニュースレター「カイビガン」の発行
- ・ 同窓会支部の強化
- ・ ASEAN 交流連絡会への参加(タイでの活動報告会に参加)
- ・ ASEAN 各国同窓会との共同プログラム実施
「小・中学生交換交流プログラム」
- ・ ASEAN 青少年スポーツ交流実施
シンガポール・マレーシア・ブルネイ
- ・ ストリート・チルドレンのためのプログラム
恵まれない子どもたちへのクリスマス料理の提供
- ・ 子ども病院、福祉施設への慰問
恵まれない子どもたちへのクリスマスプレゼント
- ・ 地方巡回医療奉仕活動
村長と協力して、無医村での医療奉仕活動
- ・ 学校への図書の贈呈

[活動資金]

- ・ 懸賞付き 2 ペン(約 7 円) 寄付運動

活動報告書やパンフレット、スライドを上映しながらのフィリピン同窓会の活動についての説明を聞いた。同窓会が、単なる帰国青年の集まりにとどまらず、ラフス会長を中心に、組織として青年招へい事業に協力しているばかりでなく、フィリピンの国づくり人づくりのために積極的に活動していることに感動した。現在では、フィリピン法務省より非常利団体として認可されている。

また、同窓会活動は、会員の会費や寄付で運営されているが、常に、資金不足問題を抱えており、ASEAN各国同窓会との共同プログラム「小・中学生交換交流プログラム」では、ホテル滞在ではなく、ホームステイにするなど、経費節約を図り、対応していることなどを知ることができた。

(2) 帰国青年活動状況

平成9年度ならびに10年度に、本事業に参加した男性1名、女性3名、計4名の帰国青年の職場を訪問し、帰国青年ならびにその上司に、現在の職務内容、参加の経緯、参加経験の活用、本事業への要望などについてヒアリングを行った。

イ. 訪問先：Local Government Devt. Foundation (地方自治体財団・内務開発基金)

面談者：Ms. Jovie Corazon B. Importante (帰国青年：以下、ジョビーさん)

Dr. Gaudioso C. Sosmena, Jr. (Executive Director 以下ソスメナ所長)

ジョビーさんは98年度にアセアン混成行政グループとして参加され、地方プログラムは福岡県・佐賀県を訪問された。現在「地方自治体財団」に勤務されている。この地方自治財団は「中央と地方の格差を是正し、地方行政を支援すること」を目的に1989年にドイツ政府の資金によって設立された。

他のアジア諸国と同じようにフィリピンでは中央と地方の経済格差が大きく、そのために様々な社会問題が起きている。農村部からは現金収入を求めて若者たちが都市部へ流入するが、都市においてもその労働力は吸収出来ず、職にあぶれた人々は貧困層を形成する。また人口の流入により都市部の住宅・交通などの生活環境は悪化の一方である。また、農村では働き手がいなくなり、老人と子供たちが取り残され、過疎化が進む。このような諸問題を解決する一つ的手段として地方に産業を起こし、地方行政を充実させることが挙げられる。この「地方自治体財団」はそのような問題を解決するため具体的には「地方公務員の研修・能力開発」を進めるとともに、「中央省庁への要望・提案」を行っている。ジョビーさんはブラカン州東北部地域の担当で、特に昨年ブラカン州で行われた「治水に関する会議」では、報告資料をまとめ、各地方に配付されたそうである。

日本を訪問して、一番印象深かったのは佐賀県でのホームステイだそうで、「ホームステイ先の子供たちは独立的で、何でも自分でしてしまうので、びっくりした。日

本の躰がそうなっているのだろう。フィリピンの子供たちのほうがもっと甘やかされていて、親が何でもやってあげてしまう。」「ホームステイ先は現代的家族だったのでフィリピンの生活と変わらなかった。もっと伝統的な家族なら、より日本文化や習慣が体験できたかもしれない。」とのことだった。

また、「招へい事業で日本に行ったことで、日本や他のアセアン諸国とのネットワークづくりができ、フィリピンでは見つからない情報も手に入れることができる。職場の人達もいろいろと期待してくれている。」と日本の経験を仕事でも活かしてくれそうである。

ロ．訪問先：Philippine Business for Social Progress Office of the Group Director

(NGO、社会開発事務所)

面談者：Mr. Vic Dugan (帰国青年：以下、ビック氏)

ビック氏は98年度にアセアン混成環境グループとして参加され、地方プログラムは北海道を訪問された。ビックさんの勤務されている「社会開発事務所」はフィリピンでも最も大きなNGO(非政府組織)の一つであり、事業に協賛する会社150社がその利益の1%を資金として提供しており、日本からも経団連から資金援助があるということだ。具体的な活動内容は年間8つの指針をたて、その中には「農家に対する援助」「ピナツボ火山の災害援助」「マングローブの育成助成」などがある。

北海道での研修では、「排水浄化の研修」や「湖水からの上水浄化設備の視察」をされ、「フィリピンでは上水道の普及率が40%なのに、日本ではほぼ100%なので感心した。」との感想だ。招へい事業については「自分は講義と見学のバランスがとれて良かったと思うが、他の参加者からは、見学個所を増やしてほしいという意見もあった。」との提案が出された。

ハ．訪問先：Development Bank of the Philippines (フィリピン開発銀行)

面談者：Ms. Veronica Emacio (帰国青年：以下、ベロニカさん)

Mr. Ronaldo S. C. Geronimo (First Senior Vice President)

ベロニカさんは、98年度フィリピン経済グループで参加され、地方プログラムは香川県を訪問された。ベロニカさんの勤務しているフィリピン開発銀行は、OECD, ODAの資金によって設立され、大企業に融資し、国政にかかわるプロジェクトを支えている。具体的には、船舶の建造・購入・メンテナンスや各種ターミナルの建造、環境維持のプロジェクト、会社設備への投資や会社更生の為の融資などを行っている。ベロニカさんはローンの担当をしており、会社を査定し、そのプロジェクトに適正であるかを調査するそうである。

訪問した香川県の印象は「橋、道路、工場などのインフラ整備が進んでいる。県庁では香川県の政策などが聞けて勉強になった。」とのことである。また、ホームステイに関しては「奥さんに着物・生け花・お茶などを教えてもらい、日本文化を体験することができた。また、青年会議所など同世代との意見交換も良い刺激となった。」ということだ。

ニ．訪問先：Overseas Economic Cooperation Fund (海外経済協力基金フィリピン事務所)

面談者：Ms. Marigoy L. Bautista (帰国青年：以下、マギーさん)

田中 裕 主席駐在員、大金 正和 次席駐在員

マギーさんは、97年度フィリピン経済グループとして参加され、地方プログラムは鹿児島県を訪問された。マギーさんの勤務されているOECFはフィリピンへの融資額の実に43%を占め、世界銀行26%、アジア開発銀行27%を大きく引き離している。日本輸出入銀行との合併予定もあり、さらにフィリピン社会に対する影響力は強まるばかりである。融資対象事業は多岐にわたり、マニラ地区のLRT(高架鉄道)建設や交通緩和事業、地方の産業振興事業、農業振興事業、森林育成プロジェクトなどがある。マギーさんは大金次席の秘書として次席のアシスタントや各種プロジェクトのサポートをされている。

鹿児島でのホームステイの印象は「最初は落ちつかなかったが、鹿児島の家族はフィリピンの家族と一緒にとても温かいことが分かって、安心した。言葉は違っても、互いに理解し合う努力が重要で、気持ちも通じ合える。」とのことだ。今後の招へい事業に対しては「より高度な専門分野での交流を目指して、2回目の研修があれば是非もう一度日本を訪問したい。また、日本の青年がフィリピンに来て、双方向での交流をするのはどうか?」といった提言を頂いた。

(4) セミナー・交流会の実施結果

イ．セミナー

出席者：調査チーム	中嶋 弘二、長川 康広、宮崎 剛、江口 剛史
帰国青年	Ms. Evangellina G. Lawas (昭和61年度 公務員)
	Mr. John Yamane Atilano (平成7年度 経済)
	Ms. Joy Santos-de Leon (昭和63年度 経済)
	Ms. Jacqueline I. Ortiz (平成8年度 経済)
	Ms. Genalyn Carcia (平成5年度 経済)
	Mr. Omy D. Conde (平成9年度 農業)
	Ms. Rizalita Edpalina (平成8年度 環境)

Mr. Lorenzo G. Vergara (平成9年度 厚生)
Ms. Jovie C. Importante (平成9年度 経済)
Ms. Leonor L. Amadure (平成9年度 社会開発)
Ms. Mary Ann T. Coronado (平成5年度 健康)
Ms. Lorna R. Maynig (平成7年度 農業)

JICA フィリピン事務所の会議室において、帰国青年12名(男性3名、女性9名)との意見交換会を行った。

① 青年招へい事業(全体)への評価

- ・日本と日本人について、理解することができた。
- ・日本人を理解することができ、それを活かして、職場の日本人や上司との関係がうまくいっている。
- ・普通のツアー旅行では体験できないことを体験できた。人生観が変わった。
- ・日本人との交流が、最も得るものがあった。そこでできたネットワークを活かして、現在、日本からの情報を得ている。また、フィリピンで働いている新しい日本人の友人もつくることができた。
- ・日本人の道徳心の高さや子供が身に付けているマナーの高さを見習って、自国で実行したり、指導に活かしている。
- ・日本での研修を通して、時間を守るマナーが身についた。会議の開始時間やレポート提出の期限を守るように心掛けている。これは、フィリピンの生活習慣では、難しいことである。
- ・身近な人に、本事業の参加を呼びかけている。
- ・アセアン混成グループだったので、他国の人も意見交換や交流することができ、有意義であった。
- ・帰国後、このプログラムを通してできた人脈を、仕事や同窓会の活動に活かしている。
- ・フィリピン国内で、近年、同窓会を開催して、同窓会活動への意欲を高めあっている。

② 研修・交流について

- ・専門分野の先進的な施設や機械を見学したり、最先端の技術に触れることができた。
- ・専門分野(看護)について、日本とフィリピンを比較することができた。
- ・実体験で日本の農業に触れることができ、自分の想像をはるかに超えて進んでいることを感じた。

- ・分野別地方プログラムで、本格的な着物の着付け、お茶のお手前を体験できたことは、大変良かった。いつまでも忘れることはできない。

③ ホームステイについて

- ・ホームステイは、何故か怖いイメージを持っていたが、とても親切なホストファミリーとの触れ合いで、さらに、日本人が好きになった。
- ・ホームステイ体験で、日本の子供は独立心が高く、フィリピンでは子供を甘やかし過ぎていると感じた。
- ・2泊3日のホームステイの期間中、どこにも出かけない家の中で、家事をさせられていた青年がいた。手伝うことには問題ないが、加減を考えて欲しかった。
- ・実年夫婦のみのホストファミリーだったので、同世代か子供たちとの話がしたかった。また、トイレにカギがなく、恥ずかしい思いをした。ホストファミリーの選考にあたっては十分な配慮が望まれる。
- ・猫アレルギーの青年がいたが、まったく考慮されることなく、困っていた。

④ プログラムへの要望・提言

- ・プログラムの計画、実施にあたっては、視察、見学、講義に偏らず、体験や人と人の交流を多く取り入れて欲しい。
- ・各研修所での説明が長過ぎた。できれば、最初の日本語での説明は省いて、英語による説明だけにして、質疑応答の時間を多くとって欲しい。
- ・帰国青年のより一層の国づくり人づくり活動を推進するために、同窓会会員から2度目の参加ができるような企画はできないだろうか。

ロ. 交流会

出席者：調査チーム 中嶋 弘二、長川 康広、宮崎 剛、江口 剛史
 フィリピン外務省北東アジア局長 Mr. Ernesto C. Castro
 JICA フィリピン事務所 後藤 弘 所長、黒柳 俊之 次長
 石賀 みちる 所員

帰国青年 Ms. Evangellina G. Lawas
 Mr. John Yamane Atilano
 Ms. Joy Santos-de Leon
 Ms. Jacqueline I. Ortiz
 Ms. Genalyn Garcia 外14名

同窓会主催の夕食会として、調査団が招待され、交流会が開催された。この日の午前中訪問したフィリピン外務省北東アジア局のカストロ局長やJICAフィリピン事務所後藤所長も参加して頂いた。また、同窓会役員はもちろんのこと、多くの帰国青年が参加してくれた。本調査中、最も多くのフィリピン青年と触れ合うことができた。

青年たちがホームステイした時の思い出や帰国後の活動の様子など、気さくに声を掛け合うことができた。また、翌日からのホームステイでお世話になるホストを引き受けてくれた青年との交流も行うことができた。

「日本で受けた歓待は忘れがたいものばかりである。このような形で、また日本の方々と交流ができることは大変うれしいことである。」とラウス会長は交流会を締めくくった。

(5) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度 家族構成
中嶋 弘二	Ms. Genalyn Garcia	会社員(建築デザイナー)・平成5年度 父・母・弟・妹・義弟
長川 康広	Mr. Philipson Yu Chua	映画館経営(副社長)・平成10年度 父・母・妻・弟4人
宮崎 剛	Ms. Lorna Maynigo	公務員(農業省)・平成8年度 姉・従姉妹
江口 剛史	Ms. Rizalita Edpalina	公務員(海洋生物学者)・平成10年度 夫

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

青年招へい事業の分野別地方プログラムを担当する九州地区(熊本県、大分県、鹿児島県、福岡県)の4名が、青年招へい事業アフターケア調査フィリピンチームを組んで、7日間の調査団業務を終了した。

イ. 交流目的と研修目的の両立

この青年招へい事業について、JICA本部では、近年、各専門分野に応じた研修をより一層強くしたいとの意向を鮮明にしてきた。今回、フィリピン側の関係者である外務省のカストロ東北アジア局長をはじめ、同窓会(フィリピンではPAJAF)のメンバーからも基本的な賛同が得られた。

ロ. アフターケア

アフターケア事業の重要な柱の一つは、同窓会の運営支援である。PAJAFは、既にフィリピン法務局に登録した公認団体である。平成2年度から、本事業参加応募者の選考にも関与し、候補者が偏らないように留意したり、来日前の青年に対する事前学習会を実施したり、本事業に大きく貢献している。ソーシャルワーカー出身のラフス会長の強力な指導力にも深く感心し、信頼できる組織であると確信することができた。

また、PAJAFは、会員相互のチームワークが良く、恵まれない子供たちや生活基盤の遅れている地域の人々への奉仕活動や社会福祉活動も幅広く熱心に行っていることに驚かせられた。

今後、JICA フィリピン事務所が対PAJAFへのフォローアップをさらに進められるよう希望する。

ハ. ホームステイ体験

これまでホームステイを世話する立場の団員が、各々フィリピン家庭(帰国青年の家庭)において、1泊2日のホームステイを体験した。言葉、食事、風呂、寝室など、自分自身がホームステイを体験して、ホストファミリーの選び方や世話になる者(来日青年)への配慮すべき点に、改めて気付くことができた。

ニ. まとめ

「団員4人全員がフィリピン訪問は初めてであり、日本とは、気候、生活習慣、交通、治安事情などが異なるこの国で、しかも7日間という限られた期間で、どれほどの成果を上げることができるだろうか。」という不安を胸に本調査が始まった。

大雪のために出発が4時間遅れて、マニラに到着したのが23時であった。しかし、JICA フィリピン事務所が手配した担当者のおかげで、入国手続きやホテルチェックインなどをスムーズにこなすことができた。また、より詳しいヒアリングや意見交換を行ううえで不可欠である通訳者や移動のための車の手配にも、十分な配慮がなされており、限られた調査時間を有効に活用することができた。

本調査団の4名すべてが、地方プログラム担当であったので、訪問先での質問や帰国青年との意見交換において、的をしぼることができ、調査の能率が上がったものと確信する。

フィリピンと日本が、さらに友好関係を深めるうえで、この青年招へい事業の果たす役割は大きいものがある。また、本事業経験者(帰国青年)が、フィリピンの国づくり人づくりのために、より一層活動してくれることを期待する。と共に、受入関係

者のさらなる努力が必要であると感じた。

(2) 団員所感

イ. 「本事業の大切さを再確認したアフターケア調査」 中嶋 弘二

9年ぶりの大雪の福岡から、真夏のマニラへ到着。入国手続きなどをスムーズに済ませ、ホテルチェックイン後、解散。ホッとして1日目が終了した。

JICA フィリピン事務所の後藤所長から、農業や経済などで、フィリピンが、特に九州と関係が深いという話を聴いて、心強く思った。本事業のフィリピン側窓口になっている外務省北東アジア局のカストロ局長は、気さくな方で、「どうしたら本事業をより充実したものにするか」についての有意義な対談ができた。

帰国青年同窓会活動の充実ぶりにも驚かされた。本事業への協力のみならず、意欲的、献身的に社会福祉活動に取り組んでいる報告を聴いて感動した。2日目の歓迎夕食会にはたくさんの帰国青年が駆けつけてくれた。

私が、ホームステイでお世話になったのは、ジェーンさんである。その日は、交通規制を避けるために、朝6時20分に、弟さんの運転で、お父さんと共に、ホテルまで迎えに来てくれた。そのために、4時起きだったそうである。ハンバーガーショップで朝食を取って、9時半頃、ジェーンさんのお宅に着いた。ここカンルバン町の空は青く澄みわたり、吹く風も心地よかった。

お母さんへの挨拶もそこそこに、また、出発。お父さんの提案で、私を有名な観光地に連れていってくれることになっていたのだ。途中、弟さんのガールフレンドと合流。11時、着いたところは、ピラ・エスケデーロ。まず、民族衣装姿のガイドの案内で、教会が博物館になっているところを見学した。展示に、世界の民族衣装コーナーがあった。マネキンに日本の着物を着せてあった。男性の紋付袴は問題なかったが、女性の振袖の着せ方に問題があった。正しい着方をジェーンさんに説明した。彼女も私も笑ってしまった。

昼食は、滝のレストランで食べた。足元には絶えず滝の水が流れていて、足を水につけながら食べるスタイルになっていた。常夏の国ならではのアイデアに富んだレストランだった。ココナッツのおわん、バナナの葉の皿でいただいたフィリピン料理は格別だった。その後、民族伝統舞踊ショーを見学した。伝統楽器やギターを生演奏に合わせて、ココナッツダンス、キャンドルダンス、漁師の踊りなどが次々と披露された。中でも、両手に4本の扇を持ち、竹を見ないで、流れるように踊るバンブーダンスは圧巻だった。

帰る途中、分譲住宅(モデルハウス)を見学した。ジェーンさんのお兄さん夫婦のために、ぜひ購入したいというのが、お父さんの希望だ。「欲しい。だけど、高い。」

おとうさんの一言に実感がこもっていた。日本と同じだ。その夜、ジェーンさんが来日した際の記念写真をみながら、話が弾んだ。

1泊2日という短い期間のホームステイだったが、フィリピンをそして、フィリピン人を知るよい機会となった。

5日目は、帰国青年の職場訪問である。どの青年も日本での経験を活かしながら、積極的に仕事や同窓会活動に取り組んでいた。また、本事業参加のための応募や選考が、広く、公平に行われていることがわかった。

フィリピン滞在中、気になった点は、中心街の大気汚染のひどさである。想像を超えるものだった。行政による排ガス規制はあるものの守られておらず、質の悪い安い燃料で走る車の排ガスがその原因であるようだ。走っている車のほとんどが日本車であった。バスやジブニーを待つ人が、ハンカチで口や鼻を押さえている姿が目についた。早急な対策が望まれる。

本調査を振り返ってみると、帰国青年たちの日本での歓待に対する感謝の心、また、その経験を活かした自国の国づくり人づくりのために帰国青年たちが支えになり、活動している実情を知り、本事業の果たす役割の大きさを再認識した。と同時に、本事業の充実のために、我々受入関係者が、ますます努力していかなければならないと強く感じた。

ロ. 今回の調査で感じたこと

長川 康広

今回の調査で特に感じたことは、事業に参加した青年が「PAJAPA-21」という組織を設立し、互いの親睦のみならず、社会活動を行いフィリピンの発展に寄与していることである。事業が一過性のものでなく、フィリピン国内で広がりを見せていることはすばらしい。

また、参加した青年は事業により、即効的な何かを得たというより、日本に対する好感を持つようになったり、帰国後の活動の中で何らかの形で活かされていると感じた。

フィリピンに対しては、訪問した海外経済協力基金マニラ事務所で説明をいただいたが、かなりの額のODA支援を行っているとのことであった。フィリピンを訪れて感じた交通渋滞、環境問題、治安問題がこのような資金を活用し、解消されることを願う。

2月6日(土)から7日(日)にかけてホームステイをした。ホストファミリーは、昨年、青年招へい事業で日本を訪問したフィリプソン・チュア(Mr. Philipson U. Chua)さん。事業の地方プログラムでは香川県と広島県を訪問したとのこと。日本の地方都市の美しい街並や近代的な工場について、特に強い印象を受けていた。ホームステイ

中、奥さんは日本に旅行中で、チュアさんが訪れていた広島に行っていた。

チュアさんは、メトロ・マニラで9つの映画館などを経営する会社の副社長。家族は、中国の福建省出身の祖父母、建設資材販売会社を経営する父と母、そして奥さん、4人の弟の10人。

ホームステイ期間中、自宅のあるマカティ市をはじめマニラ市、カラバルソン地域などを案内していただいた。チュアさんの自家用車で案内していただいたが、どこへ行っても交通が渋滞していた。人口1,000万人を超えるメトロ・マニラには地下鉄が無く、市民の移動手段は自家用車かバスやタクシーである。また、ジブニーという安価な乗合ジブも非常に多い。このようなことから、交通渋滞が恒常化し、フィリピンでは約束の時間に30分程度遅れることは許容範囲とのこと。また、道路脇にはゴミが散在しており、これをなんとかできないものかと感じた。不法占拠しているバラックやゴミがなくなると、フィリピンの印象も随分違ったものとなると思う。

また、ホームステイ初日には、チュアさんのお父さんの友人5人と昼食を共にさせていただいた。この5人は、それぞれ会社を営んでいて、毎週土曜日は情報交換のため昼食を一緒にすることとしている。ほとんどが中国系の方で大変結束が固く、フィリピン社会の中でたくましく生きていた。翌日の午前中には、中国系の教会にご家族と一緒にいった。たくさんの中国系フィリピン人が集まっていた。カトリック教徒が大部分を占めるフィリピンでは、毎週日曜日に教会に行くというのは当たり前のことかもしれないが、クリスチャンではない私にとっては新鮮で貴重な経験であった。

大変人柄のよい家族のみなさんで、家庭での生活や食べ物に、何一つ抵抗感はなかった。大変お忙しい中に、家族全員で私のお相手をしていただいたことにただただ感謝するばかりである。

ハ、「フィリピン青年から元気をもらって」

宮崎 剛

初めてのフィリピンであった。「青年招へい事業」を経験した方々は我々を温かく迎えてくれた。やはり外国に行ったとき、笑顔の歓迎はうれしいものである。上辺だけでないことは、彼等の言動でよくわかった。

PAJAFAMEMBERの方々との交流会では、食事をとりながらそれぞれの日本体験談を披露してくれた。ホームステイの話が一番多かった。やはり文化の違いによる困惑もあったようだ。だが、文化や生活習慣の違いを身をもって体験できるという意味でホームステイプログラムの役割は大きい。

さらに、過去の歴史等による先入観や誤解を解消する意味でホームステイの意義は大きいのだと実感した。日本に行く前は、「日本人と同じ屋根の下で寝ることなど想

像すらできませんでした。」と話してくれたマリグリーンさん(女性、海外経済協力基金マニラ事務所勤務)の言葉が忘れられない。鹿児島ホームステイ先での温かいもてなしで、彼女の日本人に対する“怖い”イメージが変わったという。

今回私は、農業省に勤務するローナさん宅にホームステイしたが、友達や近所の人々も集まり歓迎してくれた。お姉さんらといっしょに1日かけて作ったという料理がテーブルを埋めた。おすすめの山羊料理もおいしくいただくことができた。私は、海外でのホームステイは今回が5回目であったが、これほど陽気に楽しく夕食を過ごしたことはなかった。

少ない情報とまちがった情報が人々に正しくない認識、偏見を植え付けることになると思う。実際にその国を訪れ、その人と握手をして、顔を向き合わせ、話をするのがいかに大事であるか。ホームステイは、世界の人との間に“パイプ”をつくることができる、大事な国際交流だと改めて感じた。

今回の調査で出会った「青年招へい事業」経験者はみなそれぞれフィリピン発展の中核となって働いていたが、彼等を取りまく諸問題も深刻である。交通渋滞、道路や川沿いの不法占拠者の群れ、拳銃、排気ガス、水質汚濁などさまざまな問題を抱えていることを実感した。つい「かわいそう」「日本が援助しているんだ」という見下ろすような態度になりがちである。自戒したい。同じ“地球市民”として、フィリピンの明日を担う彼等らを応援したい。

この「青年招へい事業」によりフィリピンから日本を訪れた青年の数は、2,000名を超えている。みなそれぞれの分野で将来活躍が期待される青年であり、日本とフィリピンの“パイプ”になり両国の友好関係に大いに寄与することは間違いない。この“日本大使”とでも言うべき青年との交流を何らかの形で持続していくことができればと願う。

フィリピン青年と友情を再確認し、マニラ空港を後にした。マニラから関西国際空港までわずか3時間。近い国である。笑顔の絶えないフィリピン青年から元気ももらって帰国した。

二. ホームステイについて

江口 剛史

私がホームステイさせて頂いたステイ先の奥さんは98年度アセアン混成環境グループの参加者で、お名前はMs. Rizalita Rosalejos-Edpalina(以下、レットレットさん)です。Department of Environment and Natural Resources(環境・天然資源局)に勤務され、海洋生物学者でもあり、ウミガメやイルカの調査・研究をされており、国際的な環境会議の準備などもされるそう。

ご主人のMr. Edwin G. Edpalina(以下、エドさん)は私立学校の音楽の先生で、音楽

家でもあり、フィリピン独立100周年記念の音楽アルバム「KALAYAAN(自由)」のミュージック・ディレクターをされました。他にもたくさんのCDや音楽テープをだされており、記念に何枚か頂いた。

お二人とも30代の若い才気あふれるカップルで、このように才能のある若い人々が大勢いるフィリピンは、これからどんどん発展することは間違いないと実感した。お二人の願いは「早く赤ちゃんが欲しい。」ということでした。

2月6日(土)は交通渋滞を避けるため、朝6時にホテルで待ち合わせ、スービック元基地に向かった。スービック元基地はアメリカの海軍施設として建設され、当時は20万人の人口があったそうで、地区はスービック湾や山を含み、ゴルフコースやフィットネスクラブ、ショッピングモールも建設され、基地のイメージというよりは一つの巨大都市といった様相を呈していた。軍事施設であったので航空滑走路もあり、現在は航空貨物の中継基地として利用されている。また、観光にも力を入れており、山間部では少数民族による体験コースや生活の実演、踊りなどが楽しめた。

翌7日(日)は朝からご主人のエドさんと一緒に、市場へ出掛け、様々な食材を見ることが出来た。「レチョン」とよばれる子豚の丸焼きやマンゴー、パイナップルなど色とりどりの果物、「ミルクフィッシュ」などの魚介類や「ウベ(タロ芋の一種)」から作られたお菓子など珍しいものが多かった。市場に行く途中「ジプニー」と呼ばれる乗合バスや「バイク(サイドカー付きオートバイ)」やサイドカー付き自転車などに乗ることが出来、貴重な体験が出来ると共に、フィリピンの人の生活をかいま見ることができた。

午後はタガイタイ高原にピクニックに行き、98年度に招へい事業に参加され、九州に来た青年達も家族と一緒に加わり、いろいろな思い出話などをしながら、楽しい昼食を食べた。自分も同世代の彼らと一緒にいると、昔からの友達だったかのような感じがした。夕食は店員が歌ったり、踊ったりしながら給仕するにぎやかなフィリピン料理のレストランで、いつの間にか自分も踊りの輪の中に加わっていた。フィリピンの人は本当に明るく、歌や踊りを愛する開放的な性格であることをあらためて感じた。

今回の調査において、事前の予想以上にフィリピンの社会や人々の生活、ものの考え方などを把握できたのは、これら多くのフィリピンの友人達のお陰によるところが大きい。様々な準備をして頂いたJICA関係者の方々にお礼を述べると共に、フィリピンの友人達、特にホームステイを受入れてくださったエドバリーナ夫妻にお礼を述べたい。

(3) 提言

イ. 日本でのプログラム内容について

① 問題点

- ・ 招へい青年に対して、プログラムに関する事前の説明不足から、自分の職務関連の研修ができるものと期待しすぎたり、プログラムのねらいが十分理解できずに目的意識が低くなる場合が起っている。それが、受入側、招へい青年の双方に、プログラム内容に対する不満を残す結果となることがある。
- ・ プログラムが、見学、説明、講義ばかりに偏ることなく、体験や交流も重視して欲しいという声が多かった。
- ・ 企業訪問の場合は、単なる見学にとどまらず、そこで働く人々との意見交換会を希望する青年が多かった。

② 改善のための具体的な方策

- ・ 現地の事前研修会を重視する。同窓会の協力を得て、招へい青年に対して、目的意識を高めたり、誤解が起らないように、事前の説明を十分に行う。
- ・ 参加青年の情報(プロフィール)を、少なくとも1ヶ月前までに、担当者が入手できるようにする。
- ・ オリエンテーションのときに、プログラムの内容、目的などを明確にし、青年の参加意欲を高める。
- ・ 本事業の評価会、担当者反省会をより一層充実したものに改善して、受入側の今後の計画実施に役立てる。

ロ. ホームステイについて

① 問題点

- ・ ホストファミリーの選定にあたっては、配慮にかけられる点が見られるので改善してほしい。

② 改善のための具体的な方策

- ・ ホームステイに対する青年たちの期待と不安は、大変大きい。2泊3日という限られた期間で、青年たちに、日本及び日本人について、より深く理解してもらうために、ホストファミリーの選定には、十分な配慮が必要である。
- ・ 早く、参加青年の情報(プロフィール)を知ることができれば、より良いホームステイのアレンジが可能となる。
- ・ ホストファミリーへの事前学習会を重視し、本事業の目的、このホームステイのねらいなど十分にホストファミリーに理解してプログラムの実施に当たることが大切である。

JICA